



かいげんいん
① 開原院 石碑
けんしょう ひ
(岡本甚左衛門 顕彰碑)

- ・ 岡本甚左衛門がなくなって 25 年後の 1867 (慶応^{けいおう}3) 年、
子どもの新右衛門^{しんえもん}が父の偉業^{いぎょう}をたたえて建てた石碑。
- ・ 建てられた場所は、この地の開拓を進めるために、甚
左衛門が移り住んだ屋敷のあと地。
- ・ 石碑の正面に彫られている「開原院」は、お寺から甚
左衛門にさずけられた名前（追号）。

①

【問い】 この石碑には、どんな文字が彫られているのですか？

【答え】

正面に「開原院」、側面に、「開原院 岡本甚左衛門祐次墓
天保十三年寅六月二十一日 岡本新右衛門建之」と彫られています。

【問い】 この石碑は、甚左衛門のお墓ですか？

【答え】

甚左衛門の遺体は、金城町青原の本宅に近い森脇墓地に、先祖と一緒に葬られています。ですからこの石碑は、正式には墓とは呼べません。なお、この石碑のように、遺骨や遺品の納められていないものを、「おがみ墓」という時もあります。

【問い】 「開原院」の上にある文字は何ですか。

【答え】

この文字は梵字という古代インドの文字です。ある宗派では、ある仏様を示す梵字を、一番上に刻むことになっています。この文字は「ウーン」と読む文字で、歡喜仏になぞらえられます。自分への執着(こだわり)を捨てて、他の者の悟りを実現するために行動し、喜びを得える仏という意味です。

【問い】 この石碑が、生け垣にかこまれているのはなぜですか。

【答え】

地元の新開の人々は、甚左衛門への感謝の気持ちを忘れていません。そこで、石碑の周りに木を植えて、生け垣を作りました。そして、今でもこの石碑を大切にし、その管理や掃除を、今もずっと続けています。



②

しん
新

がい
開

- ・岡本甚左衛門らが、私財をなげうって、三代にわたって開拓をすすめてできた「ムラ」。
- ・甚左衛門は、1819(文政2)年、この地の^{かいたく}開拓を決意。ここに移り住み、覚悟を決めて開拓に打ち込んだ。
- ・平成20年現在、新開は24haの農地が広がり、57世帯201人がここで生活。甚左衛門たちの努力がなければ、ここは荒地だったかもしれない。

②

【問い】開拓が始まるまで、ここはどんな様子だったのですか。

【答え】

ここは、七条原とよばれる場所でした。低い木やササが生えた台地で、野獣（オオカミなど）がすんでいるという言い伝えがあるほど人をよせつけない場所でした。標高が220メートルある台地で、水の便^{べん}が悪く、とうてい農地には適さないと考えられていました。

【問い】甚左衛門は、なぜここに目をつけたのですか。

【答え】

当時七条村の庄屋だった甚左衛門は、村内をくまなく回って、農地になりそうな場所をさがしたそうです。確かに七条原は、水の便は悪いのですが、なだらかな台地なので、水さえ得られれば農地になりやすいと考えたからでしょう。甚左衛門は、浜田藩に、開拓をしてほしいと何度も訴^{うった}えました。けれども、費用^{ひよう}がかかるため、なかなか認^{みと}めてもらえません。それならば、自分の費用を使って開拓してもよいかとたずねたところ、許可がありました。1819(文政2)年、甚左衛門46歳のことでした。

【問い】この場所が「新開（しんがい）」と呼ばれるようになったのはなぜですか。

【答え】

甚左衛門が開拓を始めて8年後の1827(文政10)年には、農地が16町、27戸178人が住む立派^{りっぱ}な「ムラ」になりました。そこで、お役所に「新開所（しんがいしょ）」という「ムラ」ができたことを報告しました。その名前が、今も使われてるからです。



③ みょうけんつつみ 妙見堤 みやしたおおつつみ (宮下大堤)

- ・岡本甚左衛門が、最初に作った堤（ため池）。
- ・人々の飲み水を得るために作られた堤。
- ・1820(ぶんせい文政3)年、にんやく860人役で完成。

○現在の名前…妙見脇堤(みょうけんわきつつみ)

○当時の名前…宮下大堤 みやしたおおつつみ)

○面積 …2,459 平方メートル

③

【問い】 この堤の水をどうやって飲み水に使ったのですか。

【答え】

甚左衛門は、ここに人を住ませながら開拓をすすめたいと考えました。そのためには飲み水が必要です。甚左衛門はあちこちに井戸を掘りましたが、水が出ませんでした。そこでため池を作って、そのわきに井戸を掘りました。すると井戸から水がわき出てきたそうです。堤の水が、地中を通して井戸へとしみ出したのです。地中を通るので、不純物（ふじゆんぶつ）が取り除かれて、きれいな飲み水を得ることができるのです。

【問い】 このような堤を、どうやって作ったのですか。

【答え】

当時は機械はありません。どの堤もそうですが、すべて人の力で作りました。オノで木を切り、クワで土を掘り、モッコで掘った土を運びました。

当時の工事の大きさは、「何人役（なんにんやく）（何人の人が×何日かかったか）」であらわすのですが、この工事には、860人役かかったそうです。



④

はらなか おおつつみ 原中 大堤

- ・ 岡本甚左衛門が、妙見堤の次に作った、3 つの堤のうちの一つ。
- ・ 農業用水のために作られた堤。
- ・ 1824(文政^{ぶんせい}7)年に完成。

○今は水はなく、周囲の土手だけが残っている。

○水があった頃の呼び方…妙見道東堤

(みょうけんどうひがしつつみ)

○水があった頃の面積… 6, 9 4 2 平方メートル

④

【問い】 甚左衛門は、妙見堤を作ったあと、どうやって開拓をすすめたのですか。

【答え】

甚左衛門は、ここに、人を住まわせながら少しずつ開拓をすすめました。

1820(文政3)年に、妙見堤ぶんせいができた後、原中小堤、十文ヶ池という小さな堤を作って、雨水をためて、田畑を増やしていきました。

ここに住まいをした人に対しては、家の世話など、何から何まで世話をしたそうです。

1821(文政4)年、甚左衛門は、青原にある庄屋屋敷を出て、七条原が見渡せるところに、家を構えます。甚左衛門の開拓にかかる意気込みが感じられます。そして、この年、より大きな堤である「原中大堤」を作り始めるのです。

【問い】 田畑の開拓や堤作りには、道具が必要だと思うのですが、どうしたのですか。

【答え】

甚左衛門は、たたら製鉄にもかかわっていたようです。道具が必要だと考えた甚左衛門は、伊木村から、鍛冶屋を呼んできて、この地に住まわせ、道具を作らせたそうです。だんだんと人口が多くなり、新開は「ムラ」らしくなっていくのです。



⑤ つ 釣 り みぞ 溝

- ・ 土手を築いて、その上に水路を作る土木技術のこと。
築樋(つきどい)と呼ばれる場合もある。
- ・ 1833(天保4)年に完成。今も、長さが150mほどの釣り溝が昔のように残る。

⑤

【問い】なぜ、この場所でこのような土木技術が使われたのですか。

【答え】

この場所は、堤からの水が、山を切り開いた水路を通して、七条原台地に出てくるところです。もし、ここに土手を築かなければ、水は、そのまま下に流れていって、せまい範囲にしか、田に水を引けません、長い土手を七条原の中央まで築き、その上に水路を作って、ところどころに、水の落とし口をすることで、たたら谷大堤だにおおつつみ（長迫堤ながさこつつみ）や広草田小堤こうぞうたこつつみ（のちに甚左衛門堤となる小さな堤）の水を、新開しんがいの北側にまでいきわたらせることができるようになるのです。この水路のおかげで水田およそ四町よんちょう～五町の耕作が可能になったそうです。

【問い】今、この釣り溝は、どうなっていますか。

【答え】

釣り溝のうち、150メートルは 今も水路として、堤の水を新開に送り続けています。（水路部分は、コンクリートに作りかえられています。残りの部分は、水路は付け替えられ、道路として使われています。）



⑥

ほり
堀

きり
切

- ・ 山を切り通して作った水路のこと。^{ほりわりみぞ}掘割溝ともいう。
- ・ 堤の水を新開の方へ流すために、1833（天保 4）年に完成。
- ・ 長さは 63間^{けん}（111m）で、そのうち約 85m は、木樋^{もくひ}が埋められていた。

⑥

【問い】今、この堀切はどうなっていますか。

【答え】

この場所に、現在も堤からの水路が通っています。水路の部分は、土管にしたり溝にしたりして、それぞれの時期で一番良い方法で付けかえられてきました。水路を横切る道路の上から、新開方向を見ると、見下ろす形で新開集会所が見えます。この高低差こうていさによって、水は田畑へと流れていくわけです。

【問い】甚左衛門は、開拓の費用をどうやって得たのですか。

【答え】

田畑の開拓や水路・堤作りには、多額たがくひようの費用がかかります。自分の財産をすべて開拓につぎこみますが、それだけでは足らなくなりました。そこで、さまざまな工夫をします。その一部を紹介します。

①定期的に牛馬市ぎゆうばいちを開く。

農作業に使う牛や馬を売り買いする市を、定期的に開き、とまりがけで人が集まりました。さまざまな形で新開にお金がかかります。また、手数料などが貴重な収入源となりました。集まった牛馬のふんは、肥料として使いました。

②たたら製鉄をすすめたり、鍛冶屋かじやを住まわせたりする。

たたらによる鉄作りは、この地方ならではの大きな収入源でした。甚左衛門はそれを保護し、またその鉄で農機具などを作る鍛冶屋を新開に住まわせるなどして、鉄製品作りをすすめました。

③「富くじ」を開催する。

富くじというのは、今でいう宝くじのようなものです。くじを買った人の木札を箱の中に入れ、上から紙でおおい、長いキリで突いて当選番号を示して、当選金を与えるというものです。1824(文政7)年、甚左衛門は、浜田藩から特別に認められて、富くじかんじんもとの勧進元(全体を取り仕切り、払い戻し金以外の売り上げが手に入る)になることができました。月に一度開き、のちに、長浜村や口羽村くちばむらでも行いました。富くじは1835(天保6)年、藩全体で禁止になるまで約70回続けられ、貴重な資金源になりました。



ながさこつつみ だにおおつつみ

⑦ 長迫堤 (たたら谷大堤)

- ・ 農業用水用として、原中大堤の次に完成させた堤。
はらなか おおつつみ
- ・ 1824（文政 7）年から 1 年かけて、1685人役で土手の
にんやく
かさ上げをして、大きな堤となる。

現在の名前 長迫堤 （ながさこつつみ）

当時の名前 たたら谷大堤

面 積 1 万 3 千 8 8 4 平方メートル

（二十五m プール 34 個分）

現在の土手 長さ 80m 高さ 5m

⑦

【問い】 堤の土手はどうやって作るのですか。

【答え】

堤を作るには、堤の底を掘っては、土手部分に土を積み上げ、かためて高くしていくことを繰り返します。当時は、くわを使って土を掘り、モッコで土を運ぶなど、人の力で築^{きず}いていきました。

【問い】 甚左衛門は、なぜ、この堤だけでなく、より大きな堤を作ろうと考えたのですか。

【答え】

農地の開拓がすすんでいくと、田畑はできたものの、水がないために、農作物が作られないことが起きてきました。そこで、この長迫堤よりも大きな堤を作ろうと考えたのです。



じん ざ えもんつつみ ⑧ 甚左衛門堤 (新堤)

- ・ 甚左衛門が始め、その子の新右衛門し ん え も んが完成させた金城町最大の堤。
- ・ 1823(文政 6)年、甚左衛門が作り始めるが、資金がなくなり、1835(天保 6)年に工事が中断。
- ・ 1856(安政 3)年、新右衛門し ん え も んが工事を再開し、翌年完成。
- ・ 1858(安政 5)年、土手を、高さ 9m、長さ 81mにかさ上げし、金城で一番大きな堤となる。

(最後のかさ上げ工事だけでも 2400人役が必要)
にん や く

- ・ この堤へ、浜田川から水路をつけることも計画する。

○現在の名前 通称 甚左衛門堤 (正式名 新堤)

○当時の名前 広草田大堤(こうぞうたおおつつみ)

○現在の土手 長さ 120m 底面の幅34m 高さ 10m

○面 積 2万1千818平方メートル(25mプール 54 個分)

⑧

【問い】甚左衛門は、なぜ、この場所に堤を作ったのですか。

【答え】

もともと、長迫堤は「たたら谷堤」と、甚左衛門堤は、「広草田大堤」と呼ばれていました。その名前から、もともとの地形が谷であったり雑草地であったりしたことが読み取れます。谷の出口に山をつなぐように土手を築^{きず}けば、土手の内側に水がたまるわけです。

おそらく甚左衛門は、あちこち歩き回って、新開の農地よりも高い場所で、このような、堤が作りやすい場所をさがしたのでしょう。

【問い】甚左衛門堤から流れた水は、どのように新開に流れていくのですか。

【答え】

甚左衛門堤からの水路は、長迫堤の下で、長迫堤からの水と合流します。

そのまま堀切を通して、山から新開に出たところで二つの水路に分かれます。その一つが釣り溝を通して、新開の中央部へと流れます。これは、現在でも同じ流れです。



ここが「きんたの里」



⑨ 導入水路 横穴 保存施設

- ・ 浜田川の水を堤へ直接取り入れる水路の横穴入り口の保存施設。
- ・ 水路は、甚左衛門が計画・測量し、孫の与一郎が1872(明治6)年に完成させた。
- ・ 横穴の長さは、五十八間ごじゅうはちけん(約105m)。高さは100cm、幅80cm。新堤への最後の横穴水路。
- ・ 実際の横穴の入り口は、コンクリートの通路を30m進んだつきあたりにある。(土のうでおおわれていて、それ以上は進めない)
- ・ 導入水路は、計画では約5km。(実際には約3km)。

⑨

【問い】甚左衛門はなぜ、この水路を作ろうと考えたのですか。

【答え】

甚左衛門堤の水量が減ることがないようにするためです。堤はその堤に流れ込む山水や地下水をためる所です。甚左衛門は、確実に堤に水があるように、浜田川から直接水を取り入れることを考えたのです。

【問い】この水路は、今でも使われているのですか。

【答え】

いいえ、今はところどころ崩れてしまって、水は流れません。今、この水路に水が流れてなくても、堤の水がなくなっていないのは、堤からの水もれを防ぐ技術が進歩したからです。

【問い】この横穴の、堤側の入り口はどうなっていますか。

【答え】

まず、保存施設側の横穴入り口は、ちょうど 喫茶や工房のある建物の真下あたりに横穴の入り口があります。（もともと山の斜面があった位置）

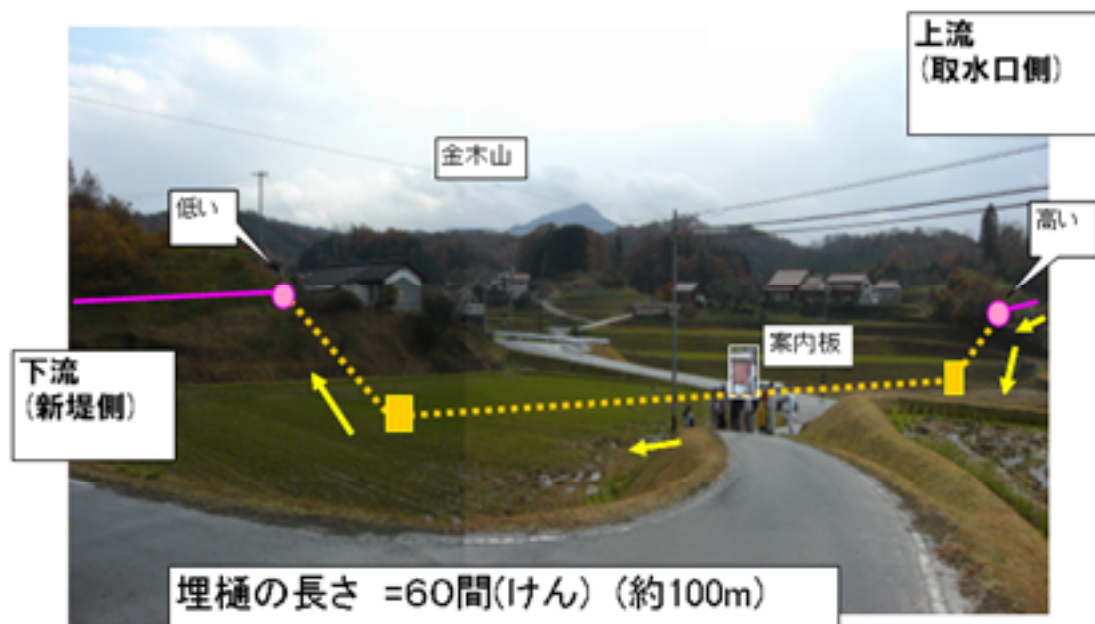
堤側の横穴入り口は、堤が山の方に切れ込んだところにありますが、横穴そのものは、今は土におおわれてしまっています。

【問い】水路の長さは、なぜ5 kmもの長さがあったのですか。

【答え】

それは、取り入れ口を浜田川の上流に作らなければいけなかったからです。甚左衛門堤は、標高 230mのところにあります。堤の近くでは浜田川はずっと低いところを流れています。（雲城郵便局近くの橋のところで、標高約 200m）浜田川が標高 250 m以上のところを流れている場所から水を引かないと、水は堤へと流れきません。そのような場所をさがすと、浜田川をずっと上流の坂松谷というところになりました。その取入れ口から水路を作ると、約 5 kmの長さが必要になったのです。

みずあげうめ ひ すいてい ず
水揚埋樋 推定図



みずあげうめ ひ
⑩水揚埋樋 (サイフォン式)

- ・ 新堤導入水路 (全長約 3 km) の中で、水揚埋樋(サイフォン式水路)になっていた場所。
- ・ 水揚埋樋とは、水圧を利用して水を下から上にあげる技術 (現代では、「サイフォン」とか「逆サイフォン」と呼ぶ技術) を使った水路で、田畑の地下に木樋を通して、谷向こうからこちら側まで、水を通した。
- ・ 設計図によると、地面の中の長さは六十間 (108m)。

⑩

【問い】 この技術は何が大変なのですか。

【答え】

途中の水もれがゆるされないということです。つまり、管の最初から最後まで密封状態になっていないと、水は谷の向こう側には流れません。樋部分は松の丸太をくりぬき、それにふたをするようにして密閉しました。地中のつなぎ部分は「こまがしら」といい、松の木をくりぬき、樋を二方向から差し込んで密閉しました。つなぎ目はご飯つぶをのりにして接着したそうです。

【問い】 この谷を越すのに水揚埋樋以外の方法はなかったのですか。

【答え】

この谷を越すためには、他にも方法が考えられますが、やはり、水揚埋樋が最適な土木技術だったと思われます。

別の方法を紹介します。

①水路橋を架ける方法（山から山へと橋を渡す方法）

橋を何で作るかも問題ですが、一番の問題は橋を架けることによって、田んぼがつぶされることでしょう。新しい田畑を作るために今ある田んぼをつぶすというのは、とうてい受け入れられません。（あわせて、この場所が浜田藩ではなく津和野藩の領地であることも関係するでしょう。）

②地形にそって、大きくう回する方法 …

水路が、今以上に長くなります。水路が長くなればなるほど、傾斜がゆるやかになり、水が流れなくなります。



⑪ どうにゆうすいろよこあな 導入水路横穴

- 甚左衛門堤へ、浜田川の水を直接取り入れる水路に作られた三つの横穴のうち、よく残っている入り口のひとつ。
- 取水口しゅすいぐちに一番近い横穴で、長さは32間けん（58m）。
- もともとは、
水路は、甚左衛門が計画・測量し、孫の与一郎よいちろうが1872（明治6）年に完成させた。
- 水路の大きさは、高さ1m、幅80cmぐらい。ここでも、横穴の上部がわずかに見えているだけ。

【問い】水路や横穴は、どうやって測量して作ったのですか。

【答え】

地上の水路を設計・建設する時には、夜間、上に提灯ちようちんをつけたさおを持った人を何人も並ばせて、上げたり下げたりして、高低こうていを測量したということです。

横穴を掘る時は、2間(約4m)の木の板に水をたらし、その流れ具合でこう配ばいを測ったそうです。

【問い】この水路には横穴がいくつあったのですか。

【答え】

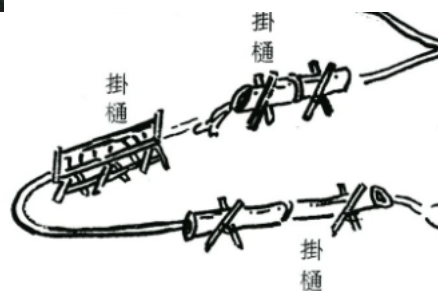
全長約3kmの水路の途中に、甚左衛門は、3つの横穴を掘ることにしました。横穴を掘らなければ、山をぐるりと回るので、水路が長くなって、もっとゆるやかになり水が流れにくくなることになります。ですから、工事は難しくても、横穴を掘ることにしたのでしょう。

導入水路に作られた横穴は、取り入れ口側からいうと次の3ヶ所です。

- ① 三十二間けん 横穴 (約58m)
取り入れ口側の横穴が残る
- ② 六十一間けん 横穴 (約145m)
両側とも、くずれてしまっている。
- ③ 五十八間けん 横穴 (約110m)
「きんたの里」の下側を通っている横穴。
取り入れ口側の入り口が、保存されている。
堤側は くずれてしまっている。

※間(けん)は、昔の長さの単位。

1間 = 1.8m



12
かけ
掛
ひ
樋

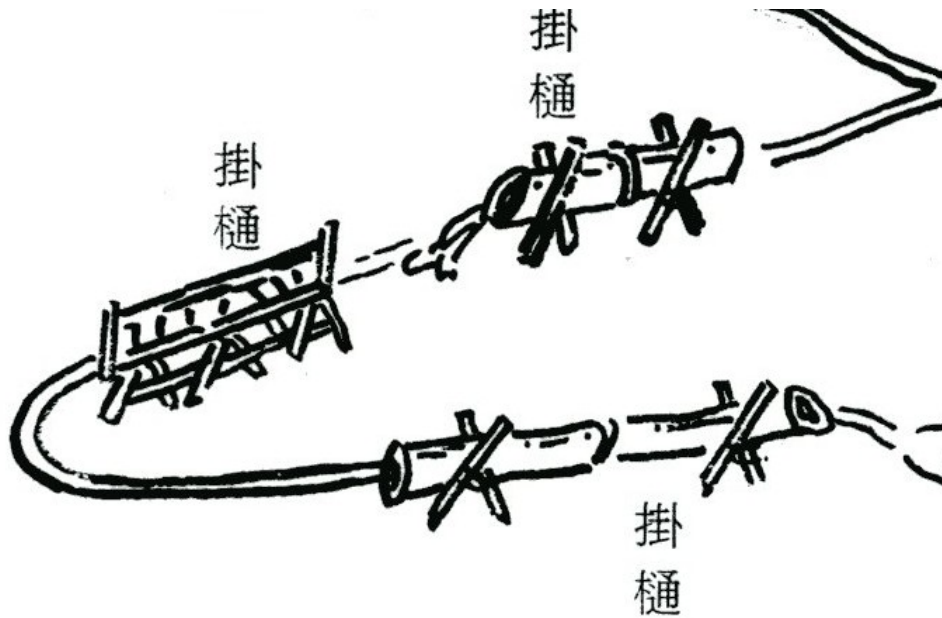
- ・ 地上に竹や木を組んで、その上に木樋もくひを渡したもの
- ・ 設計では、取水口しゅすいくちから最初の横穴までに 3 ヶ所の掛樋が作られたことになっている。
- ・ あとが残っていないので、長さや正確な場所などはわかっていない。

【問い】 どのような場所に、掛樋は作られたのですか。

【答え】

がんぼん

岩盤や砂地など、地面に溝が掘りにくいところに作られたものでしょう。





⑬ 導入水路取水口

- ・ しんづつみ新堤導入水路（全長約 3 km）の しゅすいぐち浜田川からの取水口（水を取り入れた場所）。
- ・ この地点（坂松谷）は、浜田川が標高 250m のところを流れている。

⑬

【問い】 具体的には、どのあたりですか。

【答え】

道沿いに、看板が立っています。そこから谷の方を見ると、ふたまたに分かれた立ち木が見えます。その向こう側を浜田川が流れています。立ち木のところの、やや広くよどんだところが、取水口であるといわれています。



お か も と し ょ う や や し き あ と
⑭岡 本 庄 屋 屋 敷 跡

- ・ 金城町青原にある、岡本庄屋屋敷の跡地。
- ・ 岡本甚左衛門は、七条原を開拓するために、この場所を離れ、七条原に移り住んだ。
- ・ 現在、屋敷が残っていないのは、甚左衛門が、七条原の開拓のために、私財をなげうって取り組んだためかもしれない。

【問い】 この屋敷跡には、何か特徴がありますか。

【答え】

岡本家は代々、この地の庄屋をつとめた家です。当時は、七条村（青原・若林・七条原）と伊木村、小笹村の三つの村をまかされた大きな庄屋でした。

現在、蔵の一部と石垣、石段が残っていますが、石段は右側と左側（上りと下り）とで段の高さが変えられています。これは重い荷物を運びやすいようにと工夫されているからです。



岡本甚左衛門 肖像



おかもとじんざえもん ⑮ 岡本甚左衛門の墓

- ・ 金城町青原にある、岡本甚左衛門の墓。
- ・ 現在は、墓が新しくなり、先祖の墓としてひとつに集められているが、甚左衛門らの墓は、別に、そのままの形で残っている。
- ・ 墓の正面には じがんじょうとくこじ 「慈眼浄徳居士」と法名が刻まれ、側面には天保十三年六月二十一日と亡くなった日が刻まれている。

⑮

【問い】甚左衛門の墓が、自然石なのはなぜなのでしょう。

【答え】

一説によると、甚左衛門は、亡くなる時に、息子の新右衛門に、「わしの死後は、仏事はいつでもよいぞ。新開所のために力を入れてくれ。頼んだぞ」と遺言ゆいごんしたと言われています。「墓にお金をかけるな。そんな金があったら、開拓につぎこめ。」という甚左衛門の強い思いを、息子の新右衛門が受け継いだのかもしれません。



